平成17年４月発行

国際交流

ふれあいのひろば

第20号

７月24日～30日　『子ども国際サマーキャンプ2004』

ごあいさつ

会長　野津　喬

昭和60年に発足した当協議会は、岡山の国際化とともに歩みを続け、今年20周年の意義ある節目を迎えることとなりました。この間、岡山市の国際友好交流都市も４市から６市に増え、国際交流活動は幅も厚みも奥行きも増しながら、「市民の活動」として、しっかりとした根を張ってきました。ここに至るまでには、井戸を掘り、道を付けた人、そして、それを多年にわたり守り発展させてきた多くの岡山市民のたゆみない努力があったことを忘れてはなりません。この機会に改めて心から敬意と感謝を申し上げたいと思います。

さて、平成16年度も当協議会は、岡山市とともに数々の国際交流事業に取り組むことができました。中でも、子ども国際サマーキャンプは、初めての取組みであったにもかかわらず、岡山市の国際友好交流都市を初め、遠くインドやモンゴル、グアムからの参加も得て、六つの国・地域の子どもたち58人が１週間寝食を共にしながら相互理解を深め、友情の確かな芽生えを実感するものとなりました。また、サマーキャンプと同様、平成15年度はＳＡＲＳのためやむなく中止した子供海外派遣事業では、例年を大きく上回る48人もの生徒を送ることができました。加えて、富川市、新竹市への大規模な市民訪問団の派遣、富川市祝祭訪問団の受入など、幅広い分野で市民交流を着実に進めることができました。

この他、洛陽市との技術研修生の相互派遣や友好交流サロンの諸事業を行ってきましたが、サロンでは日本語講座生の増加、外国人向け情報紙「あくら」のホームページによる提供開始、Ｅメールによる情報提供などの進展を見ることができました。

さらに、当協議会の事業ではありませんが、国際シンポジウム「松雲大師と徳川時代の朝鮮通信使」の開催やイスラエル・パレスチナの高校生を招いての「地球平和フォーラム岡山」の開催、岡山市外国人市民会議の発足など、国際福祉都市を目指す岡山市にとって価値ある取組みが相次いだことは注目すべきことであります。

これら諸事業が、平成17年度においてもさらに発展し、岡山市の国際化が一層進むよう、当協議会としても引き続き努力してまいりたいと考えているところであります。皆様の一層のご協力を切にお願いする次第であります。

目次

新竹市との交流 …… 1
富川市との交流 …… 2
・岡山市・富川市職員相互派遣 …… 3
洛陽市との交流
・第11回岡山市技術研修生帰国報告 …… 4
サンノゼ市との交流 …… 5
サンホセ市との交流 …… 6
子ども国際サマーキャンプ2004 …… 6
第10回岡山市子供海外派遣事業 …… 9
友好交流サロン
・国際交流ふれあい講演会 …… 10
・外国語会話教室 …… 11
・日本語教室 …… 12
・「あくら」の発行 …… 12
・外国語書籍・雑誌の閲覧・貸出 …… 12
・無料インターネットサービス
・ボランティア活躍記 …… 13
ふれあいトピックス …… 14
ホットミニ情報 …… 15
事務局から（募集中など） …… 15

新　竹　市　と　の　交　流

平成15年４月の岡山市と新竹市の友好交流協定締結１周年を記念して「岡山市民新竹市親善訪問団」【萩原誠司岡山市長を団長とする総勢90名】が、派遣されました。期間中一行は、新竹市国際ビーフン・肉団子祭りへの参加や、香山中学校訪問など、各種交流事業を通して、岡山市の最も新しい国際友好交流都市である新竹市を直接感じ、一層の友好関係の促進が図られました。

岡山市民新竹市親善訪問団　新竹市訪問

（平成16年10月15日～10月18日）

香山中学校訪問

新竹市主催歓迎夕食会

看海（カンハイ）公園にて植樹

新竹市国際ビーフン・肉団子祭り開幕式へ参加

富 川（プチョン）市 と の 交 流

平成14年の友好交流協定の締結以来、青少年、文化、スポーツ等、幅広い分野において市民レベルでの交流に広がりをみせている大韓民国富川市へ、昨年に引き続き締結２周年を記念して「岡山市民友好親善訪韓団」【萩原誠司岡山市長を団長とする総勢125名】が派遣されました。一行は、富川市のお祭りである、桃の里（ボクサゴル）芸術祭の視察や、徳川幕府と朝鮮王朝との善隣関係を築いた松雲大師にゆかりのある奉恩寺を視察するなどしました。また、桃の里（ボクサゴル）芸術祭開幕式においては、岡山市･富川市友好都市議員連盟会長の宮川日吉氏に、岡山市では３人目となる「富川市名誉市民証」が贈られました。

そして同年夏には、「富川市民岡山祝祭訪問団」【洪建杓（ホン コンピョ）富川市長を団長とする総勢73名】が、おかやま桃太郎まつりへ参加するために来岡され、その際の歓迎レセプションにおいて、両市の交流に貢献された安益淳（アン イクスン）富川市韓日議員連盟会長へ「岡山市国際親善特別名誉市民証」が贈られるなど、各種交流事業を通して両市の友好の絆が一層強まりました。

岡山市民友好親善訪韓団　富川市訪問

（平成16年４月30日～５月２日）

「富川市名誉市民証」が贈られる

桃の里（ボクサゴル）芸術祭

松雲大師ゆかりの寺「奉恩寺」にて植樹

陸軍士官学校にて
記念撮影▶

◀富川市主催の歓迎会

富川市民岡山祝祭訪問団　来岡

（平成16年７月30日～８月１日）

「岡山市国際親善特別名誉市民証」が贈られる

萩原市長からプレゼント

岡山市議会主催の歓迎会にて記念撮影

岡山市・富川市職員相互派遣

平成12年４月14日に韓国富川市長が来岡された際に、両市の友好の促進と発展を目的として締結された職員相互派遣協定により、第５回目として両市各１名の相互派遣を行いました。

岡山市派遣職員
氏　　名　板橋　敏栄（いたばし　としえ）
所　　属　岡山市保健所検査課
　　薬剤師
派遣期間　平成17年１月10日～平成17年３月31日
研修分野　保健所業務、食品衛生、環境衛生　等

「韓国・富川市にて」

板　橋　敏　栄

ここ韓国・富川市は、漫画とアニメーション、映画、音楽の文化的な価値を経済的な価値として商品化する文化経済都市を目指す人口80万を超す大都市です（面積は岡山の10分の１）。市内には、市役所の他、区役所、保健所、住民自治センター等があり、約2000人の職員が勤務しています。富川市に来てからおよそ２ヶ月が過ぎましたが、私は今、実際に保健所に行ったり、デパート、スーパーや飲食店への監視に同行したりしながら、保健所の業務や食品衛生行政、医薬品販売等に関する事項を中心に研修をしています。研修を通して、世界の広い範囲で人や物が行き交う現在、感染症や食品衛生に対する基本的な取り組みは日本も韓国もほぼ同様であると感じています。その反面、食品収去における重点食品が韓国独特の食品（例；唐辛子）であるとか、国の事情や特性によって異なる部分もあるということも事実であり、さまざまな発見のある毎日です。

先日行った保健所での研修では、常勤する洋医師と韓医師（韓国では、医師の種類が２種類あって、洋医師は西洋医学に基づいた治療を行う日本の一般的なお医者さんと同じで、韓医師は鍼、灸、漢方薬などを用いて治療を行うお医者さんです。）が市民に対して診察および治療を行っているところを見学させてもらいました。韓国の保健所では、岡山の保健所では行っていない診察・診療等の業務が保健所における重要な業務の一つであり、市民が気軽に訪れることのできる地域の診療所と同様の機能を持っているようで、同じ保健所という名前でも日本のそれとは果たす役割が微妙に異なるという印象を受けました。また、日本にはない韓医師が行う治療もとても興味深いものでした。次の研修では、飲食店の食品衛生についての研修を行う予定ですが、韓国の模範飲食店につけられているムグンファ（韓国の国花）マークについてなどいろいろ質問してみるつもりです。

残された期間はわずかになってきましたが、市役所での研修はもちろんのこと、研修以外の時間にも、親切で面白い韓国の人たちとの交流をできる限り楽しんで、日本に帰りたいと思います。

京畿道保健環境研究院にて

富川市派遣職員
氏　　名　孫　喜政（ソン　ヒジョン）
所　　属　富川市立図書館
　　（蔵書管理、総合資料室運営）
受入期間　平成16年11月15日～平成17年２月14日
研修分野　図書館業務・環境・文化事業

「岡山での研修を終えて」

孫　　喜　政

私にとって日本は、たった一度旅行に来ただけの疎遠な国であり、単に経済的に豊かで親切できれいだというイメージの他には特に知っていることもなかった。岡山市については、富川市の友好交流都市であり、桃の産地であることや、桃太郎伝説で知られている都市であるというくらいの認識でしかなかった。

岡山市は、富川市と異なり、あちこちに山や川、緑豊かな自然環境に恵まれた都市であり、そして国際・福祉都市を目指しているとおり、活発な活動をしている都市であることを知った。

岡山市の全般的な政策、福祉機関、図書館、環境機関など、岡山市の様々な機関を視察した。施設も立派であるが何よりうらやましかったのは、岡山市民がそれぞれのレベルでボランティア活動に積極的に参加しているという事実であった。

岡山市は、様々な分野にて市民のために各種事業を実施・運営しているが、そこでは公務員の力だけでは成功を成し遂げられないレベルで、市民が岡山市の発展のために様々な場面で活発な活動を行っていた。ボランティアたちは趣味や特技を自分だけのためでなく、自らの力を必要としている誰かのために、代価を伴わない奉仕、それ自体に喜びを感じるという思考を持ち、このような立派なボランティアを専門的かつ体系的に養成するという岡山市の政策をうらやましく思った。このような立派な市民と公務員の存在があって、岡山は世界に向かって躍進するのだと思った。

瞬く間に3ヶ月は過ぎ去った。私の人生においても忘れることができない3ヶ月だったし、岡山市は私にとって第二の故郷になった。岡山にいるとまるで富川市にいるかのような気分になり、愛情も感じる。韓国に帰って、道を行きかう人たちの中で、もし岡山弁を使っている人とすれ違ったら、まず私のほうから声をかけるかもしれません。（でも依然岡山弁は難しい…）

富川市の職員として、これまで様々な面で私の研修のためにご配慮くださりました、萩原市長をはじめとするすべての職員の皆様に感謝いたします。

特に、市民局長をはじめとする国際課職員の皆様には温かいご配慮をいただきましたおかげをもちまして、異国の地での3ヶ月を無事に、そして楽しく過ごすことができました。

振り返ってみると短い期間ではありましたが、本当に様々な経験をすることができました。日本での生活全般のあらゆることが初挑戦であった私にとって、多方面において手助けしてくださったすべての方々に深い感謝の意を表すとともに、国際課職員の一人一人のお心遣いが、私にとって大切な思い出となりました。そして、忙しい中、私の研修のためにご協力くださいました各関係機関の皆様にも、心から感謝し、温かい気持ちをもって帰国することができ、皆様の笑顔を思い浮かべながら、この紙面をとおして再度深い感謝の意を表します。

市長表敬する孫氏（中央）

第11回 岡山市技術研修生帰国

平成15年３月、洛陽市での研修が始まった後、SARSの影響で一時帰国を余儀なくされましたが、通算一年間の中国語研修を無事に終え帰国された第11回岡山市技術研修生の２名の方に、洛陽での生活や交流の思い出を綴っていただきました。

「温かいこころ」

戸田純子

留学中、何度か旅行にでる機会があったが、旅行を終え思い出と共に洛陽大学に帰ってくるとなぜかホッとしている自分がいる。まるで自分の故郷へ戻ってきたかのように。大学の近くを歩いていれば、よく顔を合わせるおじさんが自転車をこぎながらこちらに向かって手を振っている。キャンパスを歩けば、友達とすれ違い「どこ行くの？」と声をかけられる。部屋でテレビを見ていれば不意に電話がかかってくる。「今なにしてんの？友達と一緒に部屋まで遊びにいくよ。」大学にたった二人の外国人留学生。今思えば、きっと友達も私が寂しくしているのではないかと心配してくれていたのだろう。そんな優しい友人から温かいこころをもらって、私は笑顔を取り戻すことができた。日に日に強まっていくように思えた反日感情。それでも、そうやって温かく接してくれる友人たち。真の友好とは、個人対個人から始まるということを実感した。そして、忘れることができないのはある先生だ。当時流行したSARSの影響で教わった期間は２ヶ月足らずだったが、本当に素晴らしい先生だった。「人間は奢ってはならない、常に謙虚な姿勢で」

その言葉は先生の人に対する姿勢そのものを表す言葉だったように思う。時に厳しく、時に優しく、今でもその言葉は先生の姿と共に、深く私の胸に残っている。

洛陽で過ごしていく中で、激しく落ち込んでしまう時期もあった。どうしても納得できない問題に直面したとき、緊張の糸が切れたように、突然根をあげて帰りたいと思ったこともあった。しかし、この環境に身を置いたことで、今までの弱かった自分を振り返り、日本でぬくぬくと育ってきた自分の未熟さにも向き合うことができた。また、そのような逆境のなかだからこそ明るい光を見つけ、そこから這い上がる必要があることにも気づけた。そして、洛陽でこんな言葉と出会った。「語学は道具だ。語学を勉強する以前に、言葉を使って、何を相手に伝えたいのか、それが一番大事なことだ。」それを聞いた瞬間、私はこう思った。語学を使って、今度は私が洛陽でもらった温かいこころを少しでも多くの方に分けることができたら、と。最後に、１年４ヶ月の間、私たちを支えてくださり、お世話になった岡山市国際課の方々をはじめ、日中友好協会の方に厚く御礼申し上げたいと思う。

火鍋パーティ
（左端が戸田氏）

「中国で過ごした1年間」

八木絢子

一昨年アジアを震撼させたSARSの影響で、私たちの留学研修も大幅な変更を余儀なくされ、3月から1年間の予定が一時帰国し、騒ぎが収まるまで4ヶ月間日本で待機して仕切り直しとなってしまいました。待機中はどうなることかと不安でしたが、岡山市と洛陽市のご厚意により日本にいた4ヶ月間も延長してもらえ、無事に通算1年間の研修生活を送ることができました。普段はもちろん普通の中国人と同じような生活をし、ときには中国の結婚式に参加させていただいたり、休みを利用して各地を旅行したり、中国の様々な地域や風俗に触れることのできた1年だったと思っています。今思い返すと充実した生活でしたが、当初ほとんど中国語が話せなかった私にとって、洛陽での生活は戸惑いの連続でした。同じ顔つきなのに、街中には見慣れた漢字が溢れているのに、中華料理なんて日本でも普通に食べているのに、実際に生活してみると「ここが違う」というところばかりが気になりました。日本と比べるばかりで中国を知ろうとしていなかったのかもしれません。しかし、近いとは言え外国であることをきちんと認識し、違う文化にどっぷりと身を任せたとき、肩の力が抜け少し楽に過ごせるようになりました。1年間という短い期間でしたが、カルチャーショックから一歩踏み出したような気がします。

昨今、日中間の摩擦が取りざたされていますが、それは隣国であるがゆえにお互い知っているつもりになっているけれども、実際はよくは知らないというところに起因しているのかもしれません。違いを認めた上での付き合いが相手を知る第一歩になるのではないでしょうか。

そしてこれは反省点ですが留学中に考えさせられたことがありました。それは自分が日本について知らないことが多いということです。中国人に限らず、出会った外国人に日本について聞かれる機会が少なくなかったのですが、うまく説明できずもどかしい思いをしたことも多々ありました。外国を学ぶ前にまず自分の国を知らなければいけないということもしみじみ感じさせてくれた研修でした。この貴重な経験をきちんと消化して自分と周りに還元していくことが私のこれからの課題です。

洛陽の友人達と
（左から4番目が八木氏）

サンノゼ市との交流

岡山市は国際友好交流都市である米国サンノゼ市と平成４年度から専門家の相互派遣を行っています。平成９年姉妹都市縁組40周年記念事業の一環として、岡山市民から寄せられた寄付金をもとに、サンノゼ市ケリーパーク内友情日本庭園の門の建て替えが行われ、平成16年３月に新門が完成いたしました。これに伴い同年５月11日には、サンノゼ市長、岡山市議会副議長・議員出席の下、同門の落成式が行われ、この様子はサンノゼ市のホームページでも紹介されました。また、新門のデザインを担当し、落成式にも出席された岡山市の建築専門家でＮＰＯ法人ＣＤＭＪａｐａｎ事務局長である難波昭彦氏による、サンノゼ日本友情庭園新門完成についての報告会・懇親会が本市において開催されました。

サンノゼ市ケリーパーク内友情庭園新門完成落成式

（平成16年５月11日）

落成式テープカット

落成式のもよう

新門前にて

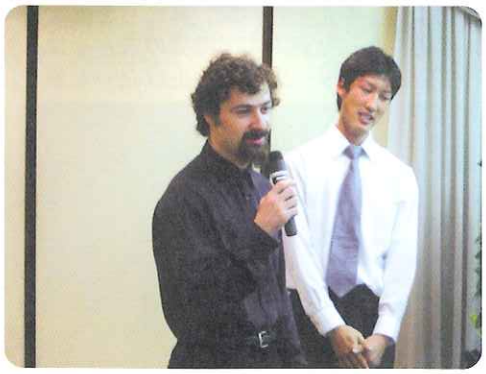
サンノゼ市日本友情庭園新門完成報告会・懇親会

（平成16年６月25日）

報告会にて説明する難波氏

懇親会にて交換留学生と歓談

報告会のもよう



サンノゼ州立大学と岡山大学の
交換留学生による挨拶

サンホセ市との交流

本市の国際友好交流都市サンホセを紹介する展示会が、市内にある「まちかど美術館サンホセ」で開かれました。この催しは、同美術館のオーナーで岡山サンホセ協会事務局長の河原馨さんが中心となって、サンホセのすばらしさを市民の皆さんにもっともっと知っていただこうと、数十年来毎年開かれているものです。建築家の河原さんは、30数年前に建築研究でサンホセを訪問、以来、コスタリカとの交流事業に力を入れてこられました。今回のサンホセ市展でも、華やかな模様が目を引くコスタリカ伝統のカレータ（牛車）や様々な民芸品を始め、サンホセ紹介の写真やリーフレットなどが、訪れる人を中米の魅惑の世界へ引き入れていました。

姉妹縁組サンホセ市展

（平成17年１月19日～１月24日）

◀熱心に見いる来場者

サンホセ市紹介のリーフレット▶

◀色鮮やかなカレータ（牛車）の模型

Tシャツ・土産品など▶

子ども国際サマーキャンプ2004

～地球を感じる　アート&エコロジーキャンプ～

今回初めて開催した「子ども国際サマーキャンプ2004」は、岡山市の国際友好交流都市をはじめとする海外の子どもたちと岡山市の子どもたちが共同生活を行い、相互理解を深めるとともに、国境を越えた友情を培い、地球時代に生きる次代の担い手として育つことを目的としています。今回は、多文化共生と、地球規模で広がる環境問題に視点を当て、「環境」と「アート」を主要テーマに直島文化村・国際キャンプ場をベースに開催しました。参加者はアジアを中心に、韓国・富川市11名、台湾・新竹市10名、インド・プーネ市10名、モンゴル４名、グアム２名、岡山市21名、13歳～16歳の総勢58名で、英語を共通言語とし、子どもたちは１週間様々なプログラムを通して友情を深めました。

７月24日(土)　出会いの日

岡山市の参加者21名とスタッフ（高校生、大学生）が中心となり、海外の参加者を歓迎するウエルカムパーティを行いました。ゲーム、自己紹介、懇談などをし、また、子ども国際サマーキャンプのテーマソングを日本の子ども達が歌い、心を込めた歓迎のパーティとなりました。

子ども国際サマーキャンプ　テーマソング

「Let's　try　Let's begin－夢は君の手の中に－」
にぎったその手をゆっくりひらいてごらん
時にはやさしく時にはつよく
君のむねにいつも語りかけているんだ
夢は今君の手の中にある
Closed so tightly, open your fist slowly
Sometimes it's easy, sometimes it's hard
Talking to your heart I hope you're listening
Your dreams are now waiting for you in your hand

7月25日(日)　仲間づくりの日

岡山市からベースキャンプとなる直島文化村･国際キャンプ場に移り、キャンプの本格的なスタートとなりました。子どもたちは日本人高校生の班付スタッフ１名と、各国の子どもたちがそれぞれ分かれ８名～９名の８班となり､ゲーム等を通して、前日からの緊張も少しずつ和らいできました。共通言語である英語で会話を進めながら、各班の名前の入った旗を作り、仲間づくりの出発となりました。また､夕食後の「地球の集いⅡ」では各都市が自国の紹介をしました。それぞれの国が特色ある発表をしたので、お互いのお国自慢と話題提供を通して相互理解が進み、交流が深まりました。

7月26日(月)　探険の日

班単位で島内探検をしました。ベネッセハウスや角屋の見学、直島女文楽体験など、島の人々や文化・アート・自然に触れ、島の豊かさを知り、探検結果を班単位で新聞にまとめ夕食後に発表しました。子ども達は暑さにも負けず協力して島内を探検したことでお互いの絆ができたことと思います。

7月27日(火)　発見の日

朝食前に班ごとで昼食の弁当（おにぎり）を作りました。豊島産業廃棄物不法投棄現場の見学をし、環境問題をより身近なものとして認識することができました。そして、昼前にチャーター船で犬島に移り、自分たちが作ったおにぎりを食べ、午後からは、シーカヤック体験や海水浴をし、犬島の自然を満喫しました。また、直島へ帰る船内で環瀬戸内海会議の方の説明を聞き、瀬戸内海の環境問題について学習しました。その後は涼しい海風を受けつつ瀬戸内海の夕日の美しさに感動しながら瀬戸大橋までのクルージングを楽しみました。